

研究者からのメッセージ

研究

— けんきゅうびより —

日和

Vol.  
06

研究は楽しい。

膨大な文献をひも解き、数えきれないほど実験を繰り返す。

それまでわからなかったことを解き明かす感動、

そしてその先に、世界を変える、未来をつくる喜びがある。

ここにあるのは、

「なぜ?」「好き」をとことん追究する、

そんなワクワクすることを一生の仕事にした先輩たちの物語。

その一つひとつが、あなたの未来を照らす道しるべになることを願って

輝き続ける研究者たちの言葉を贈ります。

P.02



[Case #01](#)

続けてきたからこそ  
実感できる醍醐味がある

岡田 まり  
産業社会学部 教授

P.04



[Case #02](#)

研究への情熱を原動力に  
大学教員としてキャリアを重ねる

高屋 和子  
経済学部 教授

P.06



[Case #03](#)

困難があったからこそ、  
現在の研究にたどり着いた

白壁 恭子  
生命科学部 教授

P.08

活動紹介

オンデマンドコンテンツの紹介

## 専門性を鍛えるため 福祉教育の進んだアメリカへ

両親共にケースワーカーで、幼い頃から私にとって福祉の仕事は、とても身近なものでした。いつしかケースワーカー（ソーシャルワーカー）を志すようになり、大学で社会福祉学を専攻。卒業後は母親と同じく病院のケースワーカーになるつもりでしたが、現場に出るには力不足だと感じ、もう少し専門性を身につけようと大学院に進学しました。

今思えば岐路だったのは、修士課程を終えた後、文化交流プログラムに参加し、アメリカで1年間を過ごしたこと。現地で社会福祉に携わるさまざまな人と出会う中で、「日本より社会福祉学の教育が進んでいるアメリカで学びたい」という気持ちがわいてきました。帰国後、すぐに準備をして翌年には再び渡米。ワシントン大学の修士課程に進学しました。

アメリカの大学院での学びは、質・量ともに日本にいた頃とは比べものにならないほど厳しく、濃密でした。授業では毎回、数本の論



文や書籍を読み込んで臨むのが当たり前。レポートの課題もひんぱんで、2年の間にずいぶん鍛えられました。また現場実習も豊富にありました。アルコールや薬物の依存症専門の病院で実習を経験し、依存症の問題にも関心が広がったことから、コロンビア大学の博士課程へ。4年間、健康教育学についても専門性を深めました。

## 福祉の現場に役立つこと 研究の目的を忘れない

アメリカで博士号を取得し、帰国したのは1996年のことです。今度こそ現場で働くつもりでしたが、あいにく声をかけてくれた病院は遠方で、そこで働くには京都を離れなければなりません。その頃、家族が重い病気に罹り、看病を手伝う必要もあって、断念。花園大学で専任講師の職を得たことで、研究者としての道を歩むことになりました。

以来、アメリカで学んだ健康教育や精神保健領域の社会福祉、ソーシャルワークを専門に、理論と実践を研究しています。近年注力しているのが、専門職を支援するスーパービジョンに関する研究です。過酷な福祉の現場でストレスを感じたり、正解のない仕事に燃え尽きてしまう方は少なくありません。福祉の現場にスーパービジョンを定着させることで、「支援する人」を支え、力づけることができ、ひいては福祉サービスの受け手である当事者の方々に寄与することもできます。そのためにスーパービジョンを実践するための研修プログラムを開発、実践するとともに、その効果を検証しています。何より大切にしているのは、現場のソーシャルワーカーや福

祉サービスを必要としている人の役に立つこと。スーパービジョンの研修を実施し、受講した方から「よくわかった」「聴いて良かった」といった声を聞くと、やりがいを感じます。

## 重責も「新しいチャレンジ」と 前向きに取り組む

家族の看病や出産・子育て、そして親の介護と、これまで家庭のさまざまな事情と両立させながら仕事を続けてきました。子どもが小さい頃は、公的な福祉サービスを活用することはもちろん、健在だった両親や、親しい近所の方にも助けられました。人に恵まれたこと、加えて身近に研究仲間でもある社会福祉の専門家がいて、相談やアドバイスを受けられたことにも支えられました。その経験から、フォーマルな制度やサービスの充実が必要ですが、それだけでなく、身近にあるインフォーマルな支援も重要だと感じています。

立命館大学に着任して20年、現在は、研究部の副部長を務めています。また行政機関の審議会委員などを引き受けることも増えてきました。重責ではありますが、「新しいことへのチャレンジ」だと前向きに捉えて取り組んでいます。

学生の皆さんに伝えたいのは、「続けることの大切さ」です。おもしろい仕事に就ければ幸せですが、その「おもしろさ」は、すぐ実感できることばかりではありません。時には苦しい修行期間を頑張り抜いた先、知識や技量が身について初めて味わえる醍醐味もあります。研究する上でも、簡単に無理だと決めつけず、限りない可能性を見つけてほしいと願っています。

## Case #01

# 続けてきたからこそ 実感できる 醍醐味がある

岡田 まり

産業社会学部 教授

### Profile

1988年、同志社大学文学研究科修士課程を修了。1992年、ワシントン大学ソーシャルワーク研究科修士課程を修了後、1996年、コロンビア大学教育学研究科博士課程修了（教育学博士）。帰国後、1998年より花園大学社会福祉学部専任講師を経て、2001年、立命館大学に着任。京都府住宅審議会委員、京都市社会福祉審議会委員、京田辺市男女共同参画審議会委員、公益社団法人薬橋ファミリークリニック理事なども歴任。



## 成長著しい中国経済に 関心を持ったのが出発点

大学3回生の時、アジア経済を専門にするゼミを選んだことが現在の研究分野との出会いでした。中国に着目した理由の一つは、香港がイギリスから中国に返還される1997年が近づき、世界の注目が集まっていたこと。それに加えて、私自身『大地の子』や『ワイルド・スワン』といった中国を舞台にしたベストセラー作品を夢中で読み、中国独特の社会や経済に興味膨らんだからでした。

とはいえ最初はあくまで卒業までのつもりで、「いずれ就活をして、企業に就職するだろう」と漠然と思い描いていました。ところが4回生になる年の1月に阪神淡路大震災が発生。就職活動もままならない中、改めて将来を真剣に考えた時、「大学院へ進学し、もう少し勉強する」という道が浮かんできました。

いざ大学院で研究を始めてみると、知りたいことが次々湧いてきて、修士論文を書いただけでは自分自身納得できなくなっていました。奨学金を得られたこともあり、さらに研究を究めるべく博士課程に進学しました。

博士課程在学中、体力的にも精神的にも大

変だったのは、1年半の中国留学を終えて帰国した後、非常勤講師をしながら博士論文の執筆に取り組んでいた頃です。家族で協力して祖母を介護していたことも重なって、寝不足と疲労の中で、研究の質をキープすることに苦労しました。

慌ただしい毎日の中、新たにやりがいを見出したのが、学生に教えることです。非常勤講師として担当していた中国語や中国経済の授業がとにかく楽しかった。研究者にとっては当たり前に見えることでも、学生から素朴な疑問を投げかけられ、「そういう風に見ているのか」と驚かされることも。新たな視点を得ることが、研究にも好影響を及ぼしました。

## 知らなかったことを知る その喜びが研究の醍醐味

私は現代中国経済の中でも財政制度と農村農業の問題に関心を持って研究しています。中国では、農地は公有制で国が各農家に耕作権を貸し付ける仕組みが主流です。広大な国土がありながら耕地は10数%しかなく、それを農家ごとに分配するため、小規模農業にならざるを得ません。また少子高齢化による

担い手不足など、実は日本の農業と共通する課題を抱えており、学び合えるところが多いと考えています。研究にあたっては、文献を読むだけでなく、実際に中国の農村地域に赴き、農家の方へのヒアリングを行うなどフィールド調査も重視しています。文献には載っていない意外な事実を農家の方から聞かされることも少なくありません。それまで知らなかったことを知る。それこそが研究の醍醐味です。

## 誰もが重要な役職を 担うのが当たり前

立命館大学に赴任したのは2005年。大学教員になると、研究だけでなく、授業を受け持つて学生を教育する役割や大学の行政的な業務も担うことになります。研究活動とのバランスを取るのには容易ではありません。最初の頃は慣れない業務に追われ、論文の締め切り前に徹夜したり、研究室に泊まり込むこともありました。

2015年、教授に就任するのと同じ時期に経済学部の副学部長に任命され、さらに2021年、研究科長を拝命しました。役職と共に大学運営に関わる職務が増え、責任も大き



くなりますが、大学教員として誰もが担うべき責務だと私は考えています。また本学には出産や子育て、介護などさまざまな事情を持つ教職員を温かくサポートしようという雰囲気があります。だから私も「大変なのはお互いさま。そういう役割が回ってきたら協力しよう」という気持ちで取り組んできました。

キャリアを重ねても、研究への情熱は衰えていません。2019年から1年間、学外研究制度を活用してイギリスへ。アジア研究で有名な研究拠点で1年間、研究に没頭しました。

新しいことを発見したり、自分の間違いを正されたり、好奇心を刺激されることが、研究を続けるモチベーションです。学生の皆さんにも、「知ることを楽しむ気持ち」を大切にしてほしいと思っています。その気持ちがずっとキャリアを築く上で糧になるはずですよ。

Case #02

# 研究への情熱を原動力に 大学教員としてキャリアを重ねる

高屋 和子 経済学部 教授

### Profile

1996年、甲南大学卒業、1998年、甲南大学大学院社会科学研究科修士課程修了。2005年、大阪市立大学経済学研究科博士課程修了後、立命館大学経済学部に着任。2015年に経済学部教授、および副学部長に就任。2021年、経済学研究科の研究科長に就任。

# 困難があったからこそ、 現在の研究に たどり着いた

白壁 恭子

生命科学部 教授



## Profile

1992年、東京大学理学部卒業、1994年、同大学院理学系研究科修士課程を修了後、1997年、京都大学大学院理学研究科博士課程を修了。東京大学医学研究所研究員、さきかけ専任研究員、慶應義塾大学医学部テニユアトラックプログラム講師などを務めた後、2015年、東京医科歯科大学大学院の准教授に就任。2018年、立命館大学生命科学部教授に就任。

以来研究を続け、2020年、私たちの研究グループは、シェディング切断酵素を阻害する膜タンパク質のアミノ酸配列を明らかにすることに成功しました。発表した論文は、学術誌「Journal of Biological Chemistry」に掲載され、上位2%にあたるEditors' Picksにも選ばれました。

出産後も子育てしながら研究を続けるのは、簡単ではありませんでした。時間が制約されること以上に苦しいのは、研究の進捗に関係なく「周囲の都合に合わせなければならない」という価値観に縛られること。そうした考えを振り払い、頭を切り替えることに苦心しました。とはいえ私は、困難があったからこそ今日まで研究を続けてこられたと思っています。出産を機に移った場所で現在の研究テーマを見つけられたし、限られた時間の中で必死に知恵を絞ることが研究の進展につながってきました。

「自分が働きかけたように社会が変わる感覚を味わってほしい」。指導する学生にいつもそう言い聞かせています。どんな小さなことでも、自分の研究によって新しいことを明らかにした経験を積み重ねてほしい。それが研究者としての「覚悟」を育てていくのだと思っています。



な壁にぶつかることになったのは、大学院に進学してからです。私に足りなかったのは、いわば研究者としての「覚悟」でした。自分自身が問題意識を持って研究課題を見出し、主体的に追求していくよう意識を変えなければ、いずれ行き詰ってしまいます。研究していても「私は一体何をしているんだろう」と悩む時期が続きました。

転機になったのは、修士課程を終えた後、東京大学を離れて京都大学の博士課程に進んだことです。個性豊かで、研究スタイルも自由。そんな闊達な雰囲気に加え、ノーベル生理学・医学賞を受賞した本庶佑先生をはじめ、先進的な研究に取り組む多くの先生のパワーに触発され、「自分の研究を追求していこう」と気持ちが固まっていきました。

とはいえ、順風満帆に研究を続けてきたわけではありません。2006年、出産と同時期に勤めていた大学との契約が切れ、無職の危機に。私を案じてくださった恩師に誘われ、東京大学医学研究所に赴任しました。そこで心機一転、これまでとは違う視点で可能性を模索したことで、新たな道が拓けました。

## 出産・子育てがあったから 研究を続けられた

新天地で着目したのは、細胞表面のタンパク質を切断して放出させるシェディングという分子機構です。シェディングは、タンパク質修飾の一種で、特定の条件で活性化した切断酵素が膜タンパク質を細胞から切り離し、血中などに放出。1つの膜タンパク質から局在の異なる2つのタンパク質を作り出すのも特徴です。

## ノーベル賞学者の講義を受け 生物学に興味を持った

数学や物理が好きだった私が生物学に興味を持ったのは大学1回生の時、分子細胞生物学の専門家、後にノーベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典先生の講義を受けたことがきっかけです。講義の内容よりも、大隅先生の心から楽しそうな話しぶりが印象的で、「生物学っておもしろいのかもしれない」と関心を持つようになりました。バイオサイエンスが躍進していた時期でもあり、大隅先生を筆頭に、画期的な研究成果を挙げている先生の授業を受ける機会に恵まれ、その勢いに惹かれるように生物化学科を選択しました。所属した研究室も活気にあふれ、先輩の大学院生らとワイワイ賑やかに実験するのが楽しかったことを覚えています。

その中でも「おもしろい」と思ったのが、生物を形づくっている化合物の中でも、その形や機能を大きく変化させるタンパク質です。とりわけ細胞膜に埋め込まれている膜タンパク質の修飾については先行研究も少なく、「まだ研究の余地があるのではないか」と興味が膨らみました。最初は研究を続けることに迷いもありましたが、指導してくださった先生の「研究者は女性が続けていきやすい仕事だと思うよ」という言葉に背中を押され、大学院進学を決めました。

## 大学院で問われた 研究者としての「覚悟」

「なんとなくおもしろそう」。そんな気持ちで研究の世界に足を踏み入れたために、大き

# Creating Futures プログラム オンデマンドコンテンツの紹介

「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」実施期間:2020年~2025年



## 研究者キャリアアップ オンデマンドコンテンツ

仕事と家庭・育児の「両立」はなぜ難しいのか。大学研究職の問題について、女性研究者の上位職登用の一層の推進や、女性研究者の活躍促進の視野を広げるコンテンツを公開しています。

### 研究者のワークライフバランスについて

講師:筒井淳也 産業社会学部 教授

- 01 基本的事実:「女性活躍」「共働き」の現状
- 02 仕事と家事・育児の「両立」はなぜ難しいのか
- 03 大学研究職の問題は?

【視聴可能な方】学校法人立命館 教職員・研究員・学生

<http://www.ritsumeai.ac.jp/research/rsupport/ondemand/> ※学内限定コンテンツです



## As a Researcher いま女性研究者として伝えたいこと

本学の女性研究リーダーからのメッセージを紹介する動画シリーズを公開しています。ご自身の研究経験や若手研究者に求められる人材像などについての思いをぜひご覧ください。

- 01 小池千恵子 薬学部 教授
- 02 河村律子 国際関係学部 教授
- 03 矢藤優子 総合心理学部 教授
- 04 相馬芳枝 元客員教授 (キャリアアドバイザー)
- 05 田中弘美 情報理工学部 教授
- 06 松原洋子 副総長・副学長 (教学・大学院担当)

<http://www.ritsumeai.ac.jp/research/rsupport/video/#tab-03>